

[要旨]

表象が「社会的である」とはいかなることか —— S. モスコヴィシの社会的表象理論の検討を通じて ——

熊谷 有理

本稿は、S. モスコヴィシの社会的表象理論における「社会的表象」の発想の明確化を目的とするものである。社会的表象理論（以下、SRT）は、É. デュルケムの社会的表象概念を心理学に回復することで、人々の間で共通の有意義な経験が構成される過程に焦点化してきた。けれども、社会的表象という言葉は様々な仕方で用いられており、この言葉を通して提示される議論の主題や分析対象、提出される発想がどのようなものであるのかについて、統一した見解は得られていない。特に、表象がいかなる意味において社会的なものとして理解されるのかという点は、他の社会的表象研究と SRT 研究との相違を明確にするために重要であるにも拘わらず、ほとんど関心を向けられてこなかった。本稿では、個人の内的・私的な認知と公的実践の区別に基づき R. ハレが分類したデュルケム以降の社会的表象の二つの発想との比較を通じて、モスコヴィシの発想を明確にする。この課題に取り組むことで、様々な社会的表象研究の中でモスコヴィシの研究が持つ特徴を提示する。

モスコヴィシの社会的表象の発想は、コミュニケーションの中で人と世界の分節化が生じる現象に光を当てる。この発想において表象が「社会的である」ということは、人々の共有された経験の構成を制約する規範的・文化的文脈の生成と、その文脈に対する人々の主観的コミットメントの組織化を可能にすることで、表象が構造と指向性を備えた集団的行為を形成する機能を持つことを意味している。本稿ではこの発想が、集団的現象を個体の内的な表象に還元する認知主義的説明の誤謬を回避しつつ、集団的現象の成立を説明する上で「心理的なもの」や「主観的なもの」が果たす理論的役割の再評価を求めるものであることを指摘し、その意義を主張する。